

近畿大学

入試問題

傾向と対策

時間内での処理能力が合格のポイント。
基礎的な問題を早く正確に解答しよう。
過去問題で、時間を計った演習に絶大な効果がある。

出題内容

基本重視、どの科目も各分野から幅広く出題されている。

だから 教科書レベルの知識を確実にすることから始めよう。

難易度

基礎から標準レベルの問題を中心にバランスよく出題されている。

だから まず基本問題を完璧に解ける力を。
その上で応用・発展問題を解く力をつけよう。

出題形式

各科目60分・全問マーク方式。各入試制度の出題形式に大きな差はない。

だから 推薦入試・一般入試、すべてが同じ出題形式。

英語



バラエティに富んだ問題を60分で解答する

苦手なタイプの問題をいかに減らせるかが合格への必須条件だ

異なる形式の7つの大問で計45個の小問が出題される。試験時間は60分。合格圏に達するためには、それらの問題を効率よく確実に正解していくことが必要である。そのためには苦手なタイプの問題をいかに減らせるかが重要。正答率の低い大問については、基本の勉強へと立ち返って早めの弱点克服を図ろう。

出題傾向のポイント

① 文法・語法問題は基本が大切。ただし、第Ⅳ問は少し難しい

第Ⅲ問(文法)は基礎～標準レベルの文法・語法上の知識問題を問うものが多く、確実に高得点を取りたい大問である。ただし、高校英語の全文法分野が出題されており、学校で限られた分野しか学習した経験がない学生は注意が必要だ。市販の一般的な教材でよいので、全分野を繰り返し演習しておくことが必須である。また、第Ⅳ問(同意文選択)は重要構文やイディオムなどの意味理解がテーマとされるが、ここ数年難度が高く、受験教材ではあまり扱われていない表現の出題も少なくない。受験生にとって対策に苦慮する大問かもしれないが、それでも基本の重要性は変わらない。第Ⅲ問と同様、日々の反復演習を怠らないようにしたい。

② 整序問題の出来がカギになる!

第Ⅵ問の語句整序問題(計4問)は多くの受験生が苦手とする問題で、ここの出来が英語全体の点数を大きく左右するといっても過言ではない。この大問の得点を上げるには相当な演習が必要になる。文法・構文やイディオムの知識を活用しつつ、正しい英文を構成するという意識をもって演習を積んでいくべきだ。

③ 頻出テーマが題材となる長文読解問題

第Ⅶ問の長文読解(計7問)は、段落ごとの内容や文中の語句の意味などを問うもの(5問)と、本文全体を対象とした内容一致問題(2問)でできている。いずれもが本文を正確に読めれば正解できる問題である。しかも、前半5問で問われた内容が最後の内容一致問題でも形を変えて再び取り上げられることが多く、前半5問と後半2問の理解度が連動する構成になっている。7つの小問を別々に解くというよりも、前半5問を確実に正解できればその理解のままに最後の2問も解けるという考え方で臨むのがよい。題材とされる英文は400語前後の標準的な分量で、環境、国際社会、言語、文化、科学技術、歴史、心理学などテーマが多岐にわたる長文問題演習を数多くこなしてもらいたい。

対策 これだけはやっておこう!

① 特徴的な問題は過去問題を教材に!

第Ⅰ問(会話問題)は会話の場面設定を読むことが大切で、会話の流れに合う選択肢を選ぶ。日程によっては、問題文が長く細かな情報処理が必要となる問題が出されることもあるので注意したい。第Ⅱ問(語句空所補充)は英文の意味を考えることも必要だが、それよりも空所前後の構文を見てそこに入る適切な品詞が何かを考えるのが大切である。8つの選択肢を常に同じ比重で考える必要がなくなるからだ。第Ⅴ問(語彙問題)も含めたこれらの近畿大学の特徴的な問題に対しては、過去問題を教材として早めに自分なりの考え方を見つけておこう。

② 問題大問ごとの解き方を身につけ、手際よく解く

「60分で45問」という問題数を考えると、各小問に割り当てられる時間にはおのずと限界がある。長文読解(第Ⅶ問)になるべく多くの時間を割きたいと思う受験生は多いだろうが、それを可能にするためには第Ⅶ問以外の大問を手際よく解くことが必要になる。自分にとって最も効率のよい大問の解答順序と時間配分を確立しておくことが望ましい。

③ 他日程も含めて過去問題演習はなるべく多めに!

近畿大学・英語の出題形式は全日程共通であり、10年以上もの間、同じ形式が維持されている。そのため、推薦・一般の区別や受験日程に関係なく過去に出題された問題が何よりもすぐれた研究素材となる。受験生としては、できる限り多くの過去問題を入手して演習を行うのが実戦力を高める上で最善の策になるだろう。また、文法問題(第Ⅲ問)や語句整序問題(第Ⅵ問)では同じ趣旨の問題が過去に何度も繰り返し出題されているので、そういう意味でも過去問題演習はなるべく多くやっていた方が有利だろう。

国語



知識問題と読解問題をバランスよく融合

全問マーク方式(四肢択一中心)。

設問数は大問一(現代文)約13問、大問二(古文)約8問、大問三(現代文)約8問。

配点は、現代文と古文がおおよそ7:3。合否ライン上の受験生の読解力に大差はないため、知識問題の出来が合否を決める。

古文は大きな差がつく分野なので、しっかり得点しよう。

出題傾向のポイント

[現代文]

大問一は評論中心で漢字5題を含む問題構成であり、哲学等のやや難しめの硬質な評論が多い。一方、大問三は評論のみならず随筆等を含め比較的読みやすい文章が出題されることが多い。本文内容は芸術・文化・文学・社会学や哲学・思想的な文章等多様で、幅広い読解力が要求される。また、設問は空所補充問題必出で、傍線部内容説明問題、理由説明問題、具体例を選ぶ問題、内容合致問題等様々な問題が出題される。全体の主旨に関わる設問もあり、文脈や主旨を素早くつかむ力が要される。

[古文]

出典の時代・ジャンルに特に偏りはなく、幅広く出題される。以前は、歌物語や歌論等の和歌関連の文章、説話文学からの出題がやや多く見られたが、最近では物語も多く出題されるようになった。また、設問では、傍線部の内容や理由説明問題、現代語訳、主語認定等の読解問題と、助動詞・助詞・敬語・和歌の修辞等知識が必要な設問も出題されている。

対策 これだけはやっておこう!

① 漢字の対策

5題必出なので必ずやっておこう。目安は漢字検定2級レベル。大学入学共通テストやセンター試験の過去問題演習に取り組むのも効果的。同音異義語に注意して覚えよう。

② 評論キーワードの習得

英単語や古典単語は覚えても、現代文単語は全く対策しない人が多い。空所補充問題など、語彙力がないと正解できない設問もあるので、市販のキーワード集などを使って基本をマスターしていこう。

③ 現代文の頻出テーマを知る

芸術・言語・哲学等の頻出テーマの知識を持っておけば難解な現代文でもスラスラ読める。

④ 古文単語をしっかりとマスター

きちんと例文の中で覚えて、多義語でも正解できるようにしよう。

⑤ 過去問題は最高の問題集

問題の出題パターンを知るとともに選択肢の見分け方の練習にもなる。また、60分で約30問を素早く解くためには時間を計ってみることも必要だ。